国指定重要無形民俗文化財

～設楽の里に神が舞う～ 花祭り

榊葉に　しで取り掛けて　拝むこそ
萬の神が　受けてよろこぶ

北設楽郡内15地区に鎌倉時代から伝わる花祭り。夜を徹し、子ども、青年が、そして神の化身が民衆とともに舞い踊る。地域の人々の心のつながりの源にもなる貴重な祭りである。

東栄町立東栄中学校長　岡田　守
（中設楽花祭り保存会長・花太夫）

昭和51年（1976年）に国の重要無形民俗文化財第1号に指定された「花祭り」は、鎌倉時代末期から室町時代にかけて、熊野の山伏や加賀白山の聖によって伝えられたと言われている。冬の時期、一昼夜、太鼓の拍子と笛の音に合わせ「テーホヘ　テホヘ」の囃子で人や鬼が舞い踊る。その伝承は、祭りに携わる地域の人々の、素朴で、強固な信仰心に支えられている。人々は花祭りを通し、八百萬の神を勧請し、五穀豊穣、家内安全、所願成就、厄難除け、生まれ清まりを祈願する。毎年11月上旬から3月上旬にかけて郡内14か所で40数種の舞が行われる。その形態は基本的には同じだが、地区ごとに微妙に違い同じものはない。ここでは、私が所属する中設楽の花祭りを中心に記す。

中設楽の花祭りは、寛政3年（1791年）に振草の古戸地区から伝わったと言われている。しかし、それ以前にも似たような神楽をしていたとも言われている。大きな特徴は明治初年の廃仏毀釈（神仏分離）により、「神道花」に変容したことである。多くの花祭りは「神仏習合花」であり、装飾も5色の色紙を使用するが、中設楽では、白紙の使用を基本としている。日本神話に基づいた構成になっていることも大きな特徴である。

神事に始まり　神事に終わる

舞が中心の花祭りであるが、すべては神事に始まり、神事に終わる。舞以外にも多くの神事が行われる。神事一切を司るのは「花太夫」である。

祭りは厳密には5日間（木曜から月曜まで）で行われる。舞を奉納するのは、土曜の夜から日曜の夕方までであるが、前後は次のような神事が行われる。

(1) 切草

祭り最初の神事で、木曜の夕方に行われる。舞庭を飾る湯蓋や神道、幣束、ぜざちなどを作るための紙、竹、剣（出刃）を祭り、願をかける。ここから花祭りが始まる。この日は扇の舞と猿田彦命の鬼の舞も奉納される。

(2) 瀧祓い・高根まつり・辻固め・釜祓い

土曜日の午後に行う神事である。瀧を拝んで水を迎え、山の上に行って悪霊を追い払い、里に来て地上を祀る。その後、釜に火を入れ、祭場の準備をする。

(3) 宮迎え・神寄せ

花祭りは氏神様の祭礼である。花祭りの拍子に乗って静かに神社から神輿を迎えるのが宮迎えである、神座に氏神様を迎え、宮人と呼ばれる地区の人々が歌ぐらを歌い、神寄せをする。祭場に八百萬の神を迎える神事である。これで準備が整い、八百萬の神とともに、いよいよ舞が始まる。

猿田彦命（榊鬼）：宇豆女との問答

(4) 湯立て・竜王鎮めの舞

舞は日曜に終わるが、祭りは月曜の午後まで続く。花太夫は、改めて神を迎え、湯を立てて場を清め、鎮めの舞を奉納する。これで花祭りがすべて終わることになる。

竜王鎮めの舞

子どもと花祭り

子どもの舞は花祭りの主役とも言える。子どもの舞は成長とともに難易度が増し、大人たちの指導も厳しくなる。舞習いは6日間、毎夜行われる。幼少の頃から、太鼓の拍子にのり，体で覚えたものはいつまで経っても忘れることはない。昭和50年代までは男子のみの舞手であったが、少子化、過疎化により女子にも門戸を広げ、さらに今では他地区や地元出身者で都市部に住む子どもたちにも協力をお願いしているのが現状である。

(1) 花の舞

舞の基本でもある花の舞。5歳前後から小学校中学年までの子どもが舞う。小さい頃は15分程度、最後の本式は40分くらいの舞となる。夜の11時頃から2時頃にかけての登場なので、半分寝ながら舞う子どもや「眠い」とぐずり出す子どももいるが成長するにつれて花祭りのとりこになっていく。

花の舞

湯ばやし

(2) 三つ舞

小学校高学年から中学生の舞である。衣装も落ち着いた大人の衣装に替わり、扇だけでなく、剣や野刃（木刀）が持ち物に加わり、少しずつ大人に近づいてくる。明け方が近い、3時から6時にかけて舞う。一番寒く、観客もほとんどいない時間である。

(3) 湯ばやし

中高生が舞う子どもの舞の集大成。子どもたちは、この舞を目指して稽古に励む。最後の舞、日曜の夕方、この舞で花祭りは最高潮を迎える。両手にはわらで作った束子を持ち、男らしく雄々しく舞う。そして最後は、まわりに向けて釜の湯をかける。舞庭は狂喜の如くという言葉がふさわしい。舞子たちは、これで大人の舞へ仲間入りである。

神の化身　鬼の舞

もう一つの主役は鬼である。鬼は神の化身とされ、3体の鬼にはそれぞれ名前がある。

(1) 猿田彦命（榊鬼）

鬼のなかでも最も神々しいのが猿田彦命である。夜中と日曜の夕方、湯ばやしの前と2度登場する。夜中の猿田彦命は「庭入り」と言う。朝7時、舞庭を出発し、地区内の1軒1軒を訪れ、それぞれの家で舞奉納する。そして、舞庭に帰ってくるのが夜中のちょうど花の舞の頃になる。夕方の舞は「宵の榊」と呼ばれ、天孫降臨をし、宇豆女と問答をする場面もある。1時間以上に及ぶ舞である。

(2) 須佐之男命（山鬼）

特に荒々しい舞が求められる須佐之男命。午前3時頃に「朝鬼」として、午前10時頃「大蛇退治」として登場する。八岐大蛇を退治し、草薙剣（天叢雲剣）を神前に捧げる舞をする。

(3) 大国主命（茂吉鬼）

前述の2体の鬼は鉞を持って舞うが、この茂吉鬼は槌を持って舞う。舞の最後には槌で蜂の巣を払って、小銭を振る舞う。午後3時頃登場する。この舞はかつては宿主の舞だった。今は舞庭が公民館や専用の建物に作られているが、以前はそれぞれの民家が花宿となり、家の庭に舞庭が設営された。その後、宿主が舞うことになっていた。その後、花祭りを運営する典座と呼ばれる者の代表者が舞っていたが、時代の流れでその制度もなくなり、今は年齢順に舞うことになっている。なかには初めて花祭りを舞う人もおり、楽しい鬼の舞になることもある。

須佐之男命

今年の花祭りは、東栄町全地区で開催を取りやめた。しかし、伝統の灯を絶やすことなく、花祭りを地区民の宝物として守っていきたい。

【奥三河のき山放送局】
第90回
東栄町中設楽花祭り